

Sant' Eustachio[®]
il caffè
dal 1938 a Roma

ガラパゴス諸島のブルボン

-大自然の聖地で育った100%グルメコーヒー-

エクアドルにあるウアヤキール湾からガラパゴス諸島までは約600マイルの距離があります。その距離の為、島はまるで時間が止まってしまったようで、他のどこにも見られない生態系が展開されており、特有の生物が生存しています。1835年、チャールズダーウィンは初めてガラパゴスに足を踏み入れました。彼の自然観察、研究にはまさに最適な場所で、後この著名な生物学者の“進化論”の大きなヒントを得た場所になります。この魅力的な島は、また別の若手作家、ハーマンメルヴィルの有名な口マンズ“Enchanted Islands”の舞台ともなりました。

1869年、マニュエルJ.コボスがフランスの農学者達をサンクリストバル島に招いた時、学者らはブルボンの古種を島に持ってきました。コーヒーはこの年初めてこの島に到着したのです。そしてコボスはコーヒー事業を始めることを決意しました。しかし手入れされていなかった農園は完全に野生の植物や草に覆われていて、1915年までは苦勞と困難の連続でした。1990年、ゴンザレス家の人々が土地所有者の同意を得て、農地の回復に全力をかけ全400ヘクタールのうち300ヘクタールを生産可能なものにまでしました。その5年後にはゴンザレス一家が事業を引き継ぎました。

ガラパゴスの著しい特徴は、その厳しい気候ともいえます。南極海から発するフンボルト寒流の影響で、サンクリストバル島では気温が、1m上がる毎に大陸でいうと4m上がるのと同じことになります。例えば0~5m間は乾燥していてサボテンや他、原生種が見られ、150~350mはたくさんの植物があり日陰コーヒー栽培もあります。それ以上の高地は厳しい気候に耐えられる植物だけが残っています。

ユネスコより“自然遺産”として登録され地元の法律により、科学物質や化学肥料の使用禁止などの保護を受け、定期的にOCIAの視察者が訪れ有機農法がちゃんと守られているか視察、検査を行います。

島の植物は驚くべきエコシステム上に成り立ち、この特徴ある気候のお陰で、**大陸で栽培されているブルボン種とは違いがはっきり分かる**コーヒーに育ちます。。火山性のミネラルが多く含まれている土壌のためか、コーヒーの実は通常より大きく葉もそれに伴い大きく育ちます。年2度の収穫なので1本の木に開花と熟したコーヒーの実が同時に見られます。大陸に植えられたコーヒーの木は普通40年ぐらいでその働きは低下しますが、このプランテーションの並外れた生産力は140年経った今でも衰えずにいます。収穫は年平均5千袋で、栽培面積と税の制限により最高一万袋と法で決められています。

ガラパゴスのコーヒーは他の有機栽培のものとは違って違う環境で育っています。農地だけでなく島全体がエコロジの聖地とも言われるこの島で育っているのですからただの有機栽培ではないのです。正しい技術を用いて土壌を汚さない、資源の使い方も道理に適っていて全く素晴らしいコーヒーです。